

岩見沢複合駅舎

(JR 岩見沢駅・岩見沢市有明交流プラザ・岩見沢市有明連絡歩道)

正会員 西村 浩君

この岩見沢複合駅舎が実現したのは、従来建築家に対し門戸が閉じられていた専門的分野である駅舎の設計を、建築家の英知を集め、JR 駅舎として初めての公募型コンペ「岩見沢駅舎建築デザインコンペ」として、岩見沢市、JR 北海道の英断により実施されたことにある。その背景には、70 年にわたり市民に親しまれてきたマンサード駅舎が焼失し、岩見沢の顔となる旧駅舎を越える新駅舎の実現を希求する、市民の熱意の高まりがあった。最優秀案として選ばれた設計者の西村浩君は、5 年間にわたり粘り強く真摯に取り組み、JR の命題と市民の期待に十全に応え、社会の資産として末永く愛される駅舎に仕上げた。

この作品が特筆に値するのは、デザイン、素材、ディテール、工法そして創出された空間などすべてにわたり、地域の風土、歴史を丹念に掘り起こし、地域の将来を見据え、市民との協働という広がりの中で生み出された成果を、丹念に積み重ね構築していることである。施設の性格上、多くの解決すべき難題が山積したと想像するが、その表現は、設計者の恣意的専断による作為はなく、葛藤の痕跡を微塵も残さない、破綻のない簡潔な形態であった。

鉄分を多く含む北海道の土でできた赤レンガと、古レールを再利用したカーテンウォールの、穏やかな既視感を伴ったファサードの印象は、岩見沢に暮らす人々にとって、駅周辺のレンガ造建築を彷彿させる見慣れた風景のひとつであろう。それは、主催者である JR 北海道が駅舎に求めた要件として「これからの駅には 100 年の時間の評価に耐える息の長いデザインが求められる。変わらない価値をデザインし、激しく気まぐれな時代の流れをしっかりと受け止め、確かな存在を示さなければならない」とあり、それに対する設計者の応答である。内部は、エントランス正面 2 階にセンターホール広場、そして回廊・ギャラリーがある。プラットホームを見下ろす回廊・ギャラリーは、旅立ちや帰郷に立ち会うドラマの舞台である。コンペ以降に実現できた空間であり、より奥行きのある駅舎になった。駅内自由通路、改札口そして待ち合いは、中心市街地からその情景が見える 2 階にある。一日 9,500 人ほどの乗降客にふさわしいヒューマンなスケールとして、親密なにぎわいを演出している。

岩見沢複合駅舎建設の意義は、全国の鉄道駅周辺の空洞化に対し、街の核となる駅の復権とその周辺の整備をめざしている点にあり、この作品はその実績として今後の大きな規範になるであろう。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。